



TITLE:

移動する身体の<ランドスケープ>: 相互応答性・偶発性・歴史

AUTHOR(S):

土井, 清美

CITATION:

土井, 清美. 移動する身体の<ランドスケープ>: 相互応答性・偶発性・
歴史. コンタクト・ゾーン 2012, 5: 62-89

ISSUE DATE:

2012-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/177256>

RIGHT:

移動する身体の〈ランドスケープ〉

——相互応答性・偶発性・歴史

土井清美

1 はじめに

サンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼路は、コンタクト・ゾーンである。1990年代以降、スペイン北西部に位置するこの聖地／観光都市へ向かって世界各地から旅をする人の数は、年々増大している。彼らの多くは動力を使わず、百～数千 km を徒歩・自転車などで移動する。多彩なナショナリティ¹⁾、動機をもつ人々が、全く違うことを考えながら、似たようなリズムで旅をする。異質な者同士が共在し、非等質な関係もある。

巡礼者向け定食の平均的料金10ユーロは、ある巡礼者にとっては居住国における飲み屋のビール1杯程度に相当し、別の人にとっては、1日の旅の予算を上回る額である。足に障がいがある人も、上等なトレッキングシューズを履きならした人も似たような旅程をたどる。1週間の休暇で進める限りの距離を歩き、道の途中で帰宅する人もいれば、退職後の余暇を使って自宅から何週間も歩き、聖地／観光都市へ到着する人もいる。このような非等質的な関係にある巡礼者の「まなざし」は、*The Tourist Gaze* [Urry 1990] のなかで J. アーリが批判的に示した、近代的権力基盤に支えられた単数形のそれではない。徒歩巡礼者のあいだにある「不公平」な条件は葛藤として顕在化するわけではほとんどないにせよ、「共在，相互作用，絡みあう理解や実践」[Pratt 1992:7] が起こっている。本稿はこのような動機、社会的背景、信仰、経済力、体力などが多様な状況においても、なおありうべき結びつきを、ランドスケープの問題にひきつけて考えることにより、コンタクト・ゾーンの議論に寄与しうるものである。

ここで、多様な社会的背景や条件のあいだにある地続きの部分を論じることと、ランドスケープについて議論することの関連性について、少し説明したい。

巡礼研究に限ったことではないが、私たち人類学者は、人々の非等質な関係を前にしたとき、その彩度を明瞭化することによって、彼らの合意形成や競合の過程を解き明かそうとしてきた（たとえば Eade & Sallnow [1991] を参照）。その手続きによって、つまり実践を社会関係や空間概念のなかに、身体を社会的方向付けのなかに抽象化することによって退けられてしまったのは、多くの人間は地上で活動する生きものである [Ingold 2009] という事実である。社会的紐帯、霊的磁場、相互承認といった抽象的問題を問うのと同様に、身体は動くと同時に世界と無媒介の接触を経験していることを忘れてはならな

いだろう。このような知的探求の枠外に置かれがちな問題に光を当てるうえで、移動することが際立った特徴である巡礼／観光は、きわめて好適な材料だと言えよう〔土井 2009〕。

議論に先立ってことわっておきたいのは、本稿では便宜的にサンティアゴ・デ・コンポステラの方へ歩く人たちを「巡礼者」とよぶが、それは（ターナー〔Turner 1974〕やイードとサルノウラ〔Eade & Sallnow 1991〕が儀礼論や巡礼論のなかで論考の対象とした）何らかの社会的身分や思考様式を共有する周縁的立場を指すのではない。

本稿が目指す具体的な問いはつまり、あらゆる背景や属性、条件の異なる人間が、同じ方向に向かってある場所を移動することは、どのように特徴づけられるのだろうか、ということである。そのばらばらの諸条件のあいだの地続きの部分を考えるためには、分析フレームの硬直性をゆるめると同時に、どこまでもスケールを広げて抽象度の高い議論にしてしまわぬよう気をつける必要がある。そこで、幅広いテーマを人間と事物との具体的な関係から論じるランドスケープ研究は有効な手がかりだといえよう。

ランドスケープとは、「美観」のような観賞する対象を指すこともあれば、「文化的景観」のような象形的（ideographic）な概念を指すこともある。また、かつては人間や植生を含む地理的総体を指していた〔Olwig 2002〕。学際的に展開されてきたランドスケープの議論は、人とそれ以外の事物の主客の関係を相対化し、物質的環境が備える、人と事物との多様かつ動態的な相互作用を明らかにしてきた。また多義的なランドスケープ概念はしばしば、すでに何らかの価値を備えた特定の——重要な——事物をめぐる、複数の実践が交錯する様子を捉えてきた。そこでは、遺跡をめぐる異集団の関わり合い〔Bender & Aitken 1998〕や、歴史的変化と形象的变化の関連性を説得的に明らかにしてきた〔Hirsch & O'Hanlon 1995〕。

そのようないわば焦点が絞られた研究の流れに対して本稿は、歩く身体と、価値の有無を前提としない——ささいでも重要でもない——さまざまな路上の諸物との遭遇へと視角を広げる。歩く身体といっても、身体それ自体に考察の軸足を置くのではなく、路上の諸物との多様なダイアローグ的側面を捉えることをここで強調しておきたい。その脈絡において、数多くのランドスケープ関連の研究のなかでも、現象学的観点と生態学的観点を接合させた O. ベルクの「風土性」に関する議論はおおいに参考になると思われる。

ベルクが論じる「風土性」とは、個人的なものと集団的なもの、物質的なものと感覚的なものが混じり合い、現在と過去、自然と文化が融合したものとして人の心身で経験されるものを指す〔ベルク 1993〕。彼の論によれば、たとえば今日、私たちが経験する法隆寺が、建立当初の伽藍配置や宗派概念とは異なるという事実は、専門家でない限りほとんど意味をもたない。それよりも訪れる人が、ずっと昔からそこには法隆寺があって今もある、自分が死んでもなお存在し続けるのだろうと感じ取り、またそれを感じさせるような寺の物的存在によって初めて成立する「おもむき」という場所の性質が、法隆寺のひとつの「風土性」ということになる。個人と集団、自然と文化、過去と現在、精神と物質などが混じり合った状態は、近代的思考によれば、まずある現象がどの概念に相当するかという整理が求められるだろう。しかしベルクは、それらが多角的かつ動的に結合したものとして経験される場所の性質こそ主題化して論じられるべきであるという。本稿では、このよ

うなベルク³⁾の概念から想を得つつ、歩いていくなかでどのように遭遇する事物に気づき、関わり合うかを見ていく。

なぜこのような観点が必要になるのだろうか。わたしがフィールドワーク中に経験した調査の「失敗」は、その理由を端的に示してくれるだろう。

わたしが巡礼路を歩いた人を対象に追跡調査をしていたとき、J. コリアーと M. コリアーが開拓した文化人類学的フォトエリシテーション (photo elicitation) 調査 [Collier & Collier 1986] のいくつかの手続きにならい、写真を用いたインタビュー調査を試みたことがあった。⁴⁾それは調査者によって撮影された巡礼路の写真をインフォーマントが見ながら想起し語ったことを、調査者が記録するというものである。提示した写真は、村の看板、路上の落書き、大聖堂、客死した巡礼者の慰霊碑などを含む10～20点である。しかし、4人のインフォーマントはいずれもわたしが撮影したもの⁵⁾のほとんどを見ていないか記憶にないことがわかり、調査そのものが成立しなかった。場所を移動している人を対象とする研究では、たとえ同じ時刻に同じ場所にいたとしても、調査者が撮影した事物と彼らが見た事物が重ならないことは多いのである。⁶⁾

この調査の「失敗」によって次のような疑問がわく。馴染みのない場所で、(出自、経済力、母語、身体能力、世代、信仰が異なる間柄で、なおかつ) 記憶に残る個々の事物や「事実」自体は必ずしも共有されてはいない。それにも拘らず、同行者はもちろんのこと、一緒に歩いていなかった人とのあいだでも、巡礼経験の全体について共感とまで言わなくても、それぞれの人にとって大切な場所であるという理解がある。インターネット上のフォーラムで意見をたたかわせたり、アソシエーションの会合に参加したり、私的な交流が続く。人々の根本的な差異と共有されない多くの事物のもと、道中の経験においてどのような結びつきがはたらいているのだろうか。

このことは同時に、次のような調査者の能力の限界を浮かびあがらせる。調査地をできるだけ迫真に描出するための長期調査は、どれほどの時間と労力をかけようと、事実の確かさを裏付けられるものにはなりえない。なぜなら、調査者が自分自身の恣意性に気づいたうえで観察されたものに因果関係を与えることができる範囲には、身体的にも知的にも人間としての限界があるからである。調査者には、混沌とした事象のなかに、何らかの法則や脈絡を見つけたいという強い思いがある。そのような状況で、調査者が気づかずにインフォーマントが自明としていること、双方が目に入れないこと、調査者が自分の思い込みで重要視していること、これらをひとつずつ特定することは不可能である。とすれば、調査者による厳密な事実の分析は、実は穴だらけの物語でもあると言える。

このような、事実をめぐる総意が得られない状況についてベルクは、ボードリヤールのポストモダン的世界観、すなわち、現代は支配的な言説も客観的な事実と呼べるものもないために、根本的に意味を欠いた世界であるとする見方を批判する。ベルクは「表象の世界と事物の世界の間のコミュニケーション」[ベルク 1993:227] が、多様な意味が充溢した世界を形成し続けると述べる。それは、わたし個人の体験とそれ以外の人々の体験、視神経を刺激するものと想像するものなどが、何らかのかたちでダイアロギック関係にあるということでもある。それが固有の経験や各事物とのあいだを地続きなものにしてい

る。

以下では、このような移動する身体と場所の諸物とが交錯する様態を、サンティアゴ巡礼路における徒歩実践をとおして考える。その多彩な性質の全てを捉えることは原理的に不可能なので、本稿は身体とものの動きが作り出すダイアローグ的關係性（相互応答性）と、意図や予測を超える生きものの動きが創り出す不自由さと可能性（偶発性⁷⁾）を中心に検討する。そして最終的に、これらの問題系が、ベンヤミンが考えた歴史の概念と応答しうるものであることを述べたい。まず2章では、不慣れな場所を進んでいくとき誰もが経験しうる、進路や方向などがわからなくなる状態について検討する。そして3章では、方向感覚や進路を得るランドマークとの関わり（3-1）、周期的で個別な実践における安定的な移動のあり方（3-2）、生きものなどの平凡な動きが出来事に大きな影響を及ぼすこと（3-3）などについて議論する。4章では、移動する身体の種種雑多なものとの関わり合いが、いかに主役不在のストーリーをかたち作るかについて議論する。これらをふまえ、さまざまな徒歩巡礼者のあいだにある地つづきのランドスケープとは、個々の事物と行為（ふるまい）の連鎖の帰結として視覚的に把握されるだけではなく、一回的で多角的な応答的關係そのものであることを明らかにする。最後の章では、接触（コンタクト）をとおして展開する世界を捉えることの意義について言及したい。

2 周囲との連続的關係が途切れるとき

いくつかあるサンティアゴへの道（カミーノ Camino）のなかでも一番人気の高い「フランス人の道（Camino Francés）」は、ピレネー山脈から西へ約800kmの距離がある（図1，2）。このルートは、道標が多いのでガイドブックや地図なしで歩いてみてもまず道を見失うことはない。この徒歩巡礼の最大の特徴は、みな西へ向かうという一方向的な移動にある。

体幹くらいの大きさのバックパックを背負い、多くはそこにホタテガイをつけ、杖を持ち、時々立ち止まっては来た道と行く先を交互に見やっている人を見かければ、たいいての道沿いの人々は、その人がサンティアゴ・デ・コンポステラまで歩いて巡礼をしているのだとわかる。とはいえ、「フランス人の道」（以下カミーノと略す）を歩くことが、スペインにおいて浸透したひとつの余暇の過ごし方というわけでもない。わたしが巡礼宿（albergue 以下「アルベルゲ」と表記）で巡礼者のためのボランティアをしていたとき、カミーノ周辺の村人も町の人、お金をもらったとしてもやらないと言う人もいれば、ミサの時間に教会を通過することは良いことではないと言う人もいた。バスターミナルや駅で、カミーノを歩く、と切符売りの人に言えば、彼らは片腕を上げて垂れた手先をブラブラと振って「難儀なこと」という身振りをする。

自宅から歩き始めるのでなければ、多くの人は任意の出発点の近くまで公共交通機関を使う。しかし、実際に列車やバスを降りてカミーノを歩き始めるのはどこからだと思ふかという問いに対しては、みな一様に答えに窮する。少し考えてから、それは「カミーノ」と名付けられた地点からだろうと答える。しかし、歩く巡礼者の感覚としては、敷居をま

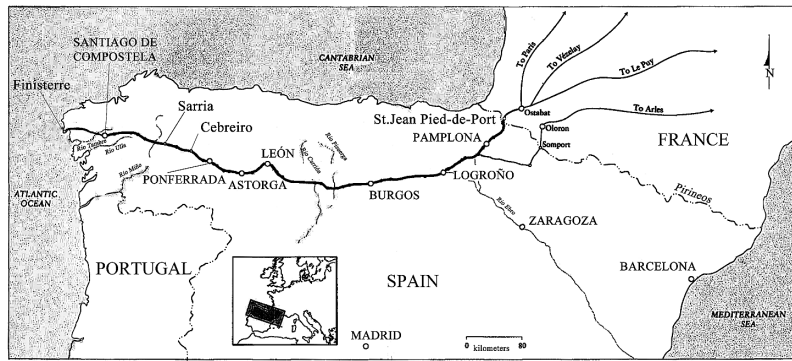


図1 サンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼路のなかでも最も一般的なルート「フランスの道 (Camino Francés)」。徒歩巡礼者は東から西へ (右から左へ)、イベリア半島北部を移動する。(Frey [1998 : xiv-xv] をもとに筆者作成)

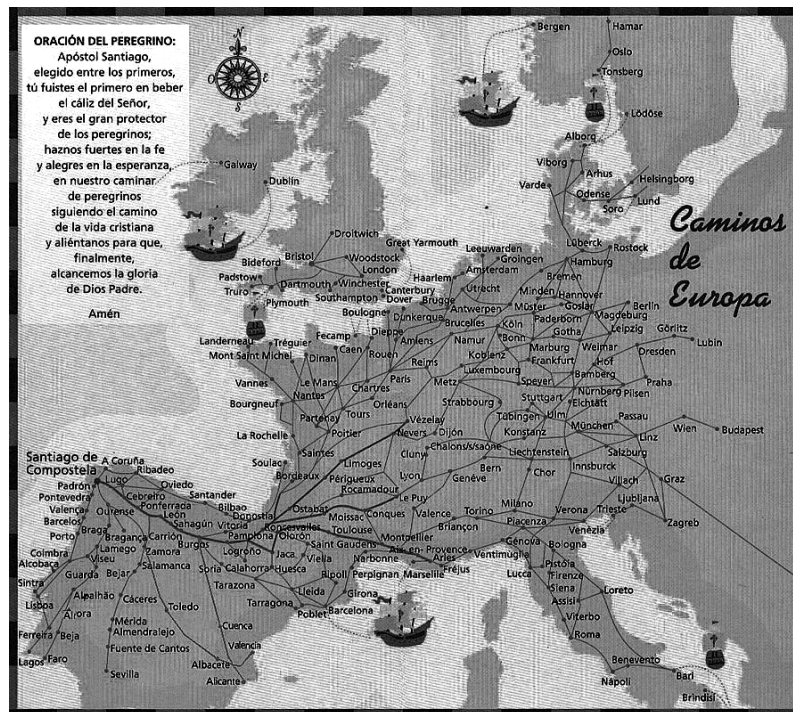


図2 中世に隆盛した巡礼の名残から「ヤコブの道」と名付けられた道は西欧を網目状に走る。(巡礼者手帳 (credencial) から転載)

たぐように、「さあ、ここからがカミーノだ」と襟を正すことはない。ある巡礼者は「カミーノを歩き始める瞬間を答えるのは、居眠りして夢を見る瞬間を答えるのと同じ、無理なことだ」と語る。多くの場合、意識に先んじて、身体が特定の物的環境へ置かれ、気づいたときにはすでにカミーノに足を踏み込んでいるのである。

しかし、巡礼はいつも順調に始まるわけではない。主要なガイドブックに掲載された地図には、大聖堂など目を引くランドマークやバスターミナル、駅の位置などが示されているが、そこからカミーノへの説明書きはない。そのため、初めて歩く人は、Pamplona や Burgos, León, Astorga, Sarria などの都市中心部から離れた駅やバスターミナルから、ガイドブックと目の前に広がる見知らぬ世界を交互に見やり、行き交う人にカミーノはど



写真1 ログローニョの町中心部へ向かう途中。遠方に高層建築がいくつか見える。それらは、見る人に対して方向感覚を与えるが、進路を示すものではない。



写真2 カミーノの方向を示す標識。巡礼者の出発地点のひとつ、Leónの市街地の一角にて矢印の方向が紛らわしいことも多い。

こかと尋ねながら歩き始める。その過程で、高さや形状において町並みから傑出している大聖堂や高層建築物は、巡礼者が方向感覚を得るうえで役に立つ。だが、そこに至るまでの進路の重要な手がかりにはならない(写真1)。ある巡礼経験者は、「2回目だったけれど、その駅から出発したことがなかったので、どうやって道にたどり着こうかと思ったら、すぐに道路の反対側をこちらに向かってくる人(巡礼者)がいて、ここでいいんだと思った」と言うように、進路に関していえば、バックパックを背負って歩く姿とその向きは、重要な手がかりとなる。運よく道標をひとつ見つけても、たとえばそれが矢印ではなく聖ヤコブの象徴であるホタテガイのマークの場合、行くべき方向が貝の形の開いた方なのか閉じた方なのかは明示されていない⁸⁾(写真2)。そのため、地図どおりに場所を把握できて容易にカミーノの「入口」を見つける人もいれば、手がかりとなるサインをうまく見つけられず(写真3)、気づくとカミーノにいたという人もいる。たとえば、ある60歳代の巡礼者は自身の旅行記のなかで、Saint Jean Pie de Portの駅に午前11時ごろに到着し、歩き出してから様子を、次のように記している。

さて、現実的なことを考えるべきときが来た。駅からどうやってカミーノへ行けばいいのだ? もう午前11時。暗くなる前にピレネーを越えたいから急がなければいけない。(中略) 落ち着かなくてはいけない。町までの道を見つけなくては。迷って体力を消耗してはだめだ。(中略) わたしの目的地は山の向こう側だ。印のついた山道を見つけ出したい。もうひとつの道が道路沿いにある。町を出たら、山道ではなくて、道路を進んでいることに気づいた。今日中に Roncesvalles に着けるだろうか。(中略) この道を進み続けることにする。こっちもカミーノだとされているし、山道を探す時間などない [Hoinacki 1996:4-5]。

足の赴くままではなく、カミーノという道を歩きたいという思いがもたらす歩みは、先にも述べたように、混沌とした世界から物の配置や方角などを探ろうとする一方で、気づくとすでにそこにいたという経験を巡礼者に与える。



写真3 巡礼者の出発地点のひとつ、Pamplona 市街地の一角。この写真の範囲内でさえ、複数の移動手段があり、無数の進路が潜在することがわかる。正面の建物の一番大きなドア脇にカミーノを示す小さな道標が貼られている。

出だしに余計な体力を使う人も、場所を把握することに苦労しない人も、数日歩くうちに、必ずと言ってよいほど一度は道に迷う。それは、暗い時間帯に歩く場合や、一緒に歩いている人とのおしゃべりに夢中になったり、ひとりで考えごとをしながら歩いているときなどに起こる。地形、季節、天気、そして巡礼宿からの距離などのさまざまな条件次第で、他の巡礼者と非常に密集して歩くこともあれば、気づくと前後左右に人影が全くなり、自分がどこを歩いているのかわからなくなる瞬間もある。

このような方向感覚や進路を見失う経験は瞬間的でありながら、詳細で鮮烈な記憶をかたち⁹⁾作る。2009年初夏、わたしとダビ、シェナイ、ニコルの4人で Grañón への道（写真4）を歩いて迷ったとき、次のような顛末だったと記憶している。

Grañón 村には、教会の中にある寄付制の巡礼宿がある。以前歩いたときには満室で泊まらなかったというニコルの話や、わたしのお気に入りの宿であることを聞いて、初めての巡礼となるダビもシェナイも、絶対にマットレス¹⁰⁾を確保したいと、少々急ぎ足になっていた。わたしはシェナイと並んで歩き、ニコルとダビが私たちの後ろを歩いていた。何の会話をしていたか憶えていないが、とにかくいい調子で歩いていた気がする。体はどこも痛くないし、日差しは強いが暑すぎず、少量の砂で覆われた土の道は足に負担が少なく感じられた。今晚泊まりたい宿も決まっていたため、あと何 km、あと何時間で到着するかも感覚的に予測できた。残るは左右の足を交互に出すだけだったので、おしゃべりに夢中になっていたのだと思う。しかしあるとき、わたしは周囲に人影がないことに気づいた。誰もいないね、とわたしが言い、シェナイもそうだね、と言いながら歩き続けた。少し経って、道標がないことにも気づいた。

わたしはニコルとダビに矢印がないことを言おうと振り返ると、その100m ほど後方に1人の巡礼者が見えたので、きっと間違っていないのだろうと思いなおした。シェナイは、まっすぐの一本道だと矢印がないことだってあるよ、と言った。しかし、しばらく経ってもやはり他の巡礼者も道標も見えない。でも後ろから例の人も来る。シェナイは足を止めて言った。「道に迷ったんだ (Nos perdimos)」。私たちはガイドブックを出して自分たちがどこにいるのかを理解しようとしたが、全くわからなかった。小川が近くを流れているが、これは地図に載るほど大きいものではないよね、とニコルが言った。ダビが、丘へ上って他の巡礼者の群れを見つけてくる、と言って立ち去った。そのあいだに約100m 後方にいた巡礼者も私たちに追いついた。短い白髪と白髭のその巡礼者は、あなたたちについて来たらこんなことになった、と言った。私たち4人は木陰を探し、荷物を降ろしてダビが戻ってくるのを待った。その後、ダビは去った方向からワンボックスカーの助手席に乗って戻ってきた。運転してきた老人は、私たちが知らぬ間に全く違う方向に5 km ほど来



写真4 Grañón へ向かう途中、振り返って撮影。歩く人の姿が続く。



写真5 村の人の車に少しの間だけ乗せてもらう。右はダビ。

てしまったこと、Grañónに行きたいならば、あちらに向かってあと約7km歩かなくてはならないことを教えてくれ、ついでに車に乗るかと言った。単純に計算しても1時間以上も道を間違えていたことに気づかなかったのだ。わたしはもう車に乗せてもらう以外の選択肢を考えもしなかったが、3人は乗るべきか乗らざるべきか話し合っていた。もう1人のドイツ語圏からの巡礼者は黙って様子をうかがっていた。結局、わたしを含む5人は目的地のGrañónのアルベルゲの手前2kmのところまで車に乗せてもらう(写真5)という奇妙なことになった。

ここで長々と書いたようなカミーノから外れることは、今まで行為と事物とが複雑で順調な連鎖としてあったものが途切れる瞬間の経験といえる。ただし、徒歩を民族誌的に研究したL. フェルグンストによれば、その途切れる瞬間にも種類があるという。フェルグンストは、「道を見失うこと」(losing the way)と「道に迷うこと」(getting lost)は、どちらも今まで続けてきた、地に足着いた感覚やリズム感を失うものだが、同じことではないと指摘する[Vergunst 2008]。「道を見失うこと」とは、本来の場所においてたどっていた線から外れて、自分自身と周囲との関係が途切れる経験であり、思わず体勢を立て直そうとする経験である[Vergunst 2008]。他方「道に迷うこと」とは、今ここがどこであり、自分がどこへ行きたいのかを、即興的に探索し発見しながら進む意味で、さまようことに似た「自由」がある。当然ながらこの「自由」は、意のままに動けるという意味ではなく、不安感や抛りどころのなさをも含むものだろう。このように考えると、バスや列車から降りてカミーノと名付けられた場所にたどり着く過程は、道に迷うことである。他方、カミーノを歩いている途中に、シェナイたち4人が道を間違えた瞬間から現在居るところまでの距離を把握できない状態は道を見失うことと言える。

カミーノでは、この両方が同時に生起することもある。道に迷うと同時に道を見失った次のようなエピソードを紹介しよう。ある巡礼者は次のように語った。Astorgaへ向かうはずの途中、樹影ひとつなくどこへ通じるともわからないような道で、「真昼に平原の中で立ち止まって辺りを見渡すと、前後左右に人の姿が全くなく、自分はどちらから来て、

どちらに進むべきか一瞬わからなくなって呆然とした。けれどもその後、土に残された多くの足跡の向きに気づいて進む方向がわかった」。このように語る人の場合、たとえ地図上で正しく「カミーノ」上にいたとしても、多くの足跡の向きを見つけるまでのあいだ、周囲との順調で連続的な関係が失われ、大平原に孤立して立っているというむき出しの現実直面させられた。方向感覚も進路もわからなくなり孤立した状況においてその巡礼者は、足跡という、かすかな痕跡と向き合った。このときの足跡とは、メタフォリカルな意味ではまったくなく、誰もが土の上を歩けば残してしまい、雨が降れば消えてしまうような触知できる靴裏の跡である。つまり巡礼者は、この道をたどっていけばよいという慣習的な思考が通用するときには周囲の物的環境を見てはおらず、その連続性から外れてはじめて、形象ないし像に意識を向けるのである。

ベンヤミンは歴史的唯物論という観点に着目し、「現在が過去に対してもつ関係は純粹に時間的・連続的なものではあるが、かつてあったものがこの今に対してもつ関係は弁証法的」[ベンヤミン 2003:184] であると述べる。ベンヤミンによれば、慣例的経験から脱して「今、この瞬間」の詳細かつ鮮烈に経験させられるような危機的瞬間は、かつて起こったことの痕跡からの呼びかけに応じる経験であるという。言い換えれば、自分自身の立ち位置に混乱する瞬間に巡礼者は、過去から現在にかけての順調に推移する関係から断ち切れ、かつて起こった出来事の痕跡との跳躍的な——ダイアローグ的な——関係を手にするのである。

フェルグンストはまた、次のようにも述べる。「道を見失うという経験は、本来の場所で特定のルートがある、と思いつくからこそのものである。できれば避けたいと誰もが思っていることなのだが」[Vergunst 2008:118]。多様な巡礼者はまさしく、出発点と到達点のあいだに、たどるべき何か筋が通ったものがあるはずだと想像する点において、ひとつの志向性がある。したがって筋から外れたことに気づく、時間が停止したような経験は、耳を傾け、目を凝らしながら何かのサインを待つ瞬間となる。これらのことは、ベンヤミンの表現で言えば、「静止状態における弁証法」といえるだろう。このような周囲との連続的な関係が途切れ、呆然とした瞬間に、現在を主とし過去を解釈すべき客体とするのではなく、向こうからやってくる過去の瞬間を受け止めようとする姿勢が創出される。残された足跡や、ガイドブックの地図にも載らないような小川などは、思考の連続性が切断され、立ち止まり、あたりのものとの初めての出会いを進路の手がかりにしようとする者に向かって瞬間的に現前するのである。

カミーノは、宗教、文化、歴史、あるいはトレッキングルートなど複数のコードを含みこんだ「たどるべき道」という連想を、道を探す人々に対してはたらきかける。それは、個々の事物に対して視覚的な注意を向けなくても、身体運動とそれにそって推移していく周囲の諸物とのあいだにリズムが順調に刻まれているからと考えられる。それはまた、一歩踏み出すたびに違う光景が広がるということに、アスファルトと砂利道が足底に与える感触の違いに、道標がときどき目に入ることに、いちいち感動したり戸惑わない自明性と関わっている。広がる世界との最初の接触にいちいち動揺せずに刻まれるリズムは、つきつめれば、私たちが「日常的」とよぶような、いつもと同じ、という感覚をもたらす。だ

が、ときに身体と周囲の事物の順調な関係が途切れ、道を見つけたり、道に迷ったりするなかで、奇妙だが新しい律動的な感覚がよび戻される。そのようなわけで、移動の過程で避けたいことであるにも拘らず、それらの出来事が旅の思い出として語られる場合には一段と鮮明なエピソードになると考えられる。

身体には視力、想像力、筋力などの力が備わっているが、それには限界がある。だからこそ、やりたいようにことを運ぼうとするほどに、人間的思考の範囲を超える物的環境の作用が働き、予期せぬハプニングが生じる。このような偶発的状况において、価値や意味づけが取り払われた、より原初的な状況との応答関係がもたらされるのである。

しかしこのような場所と身体の関係は、積極的に「道に迷うこと」により即興的な発見を楽しむ散策や散歩と同じではない。多くの巡礼者は都会より田舎を歩くことを好む傾向があるのだが、写真3と写真12の違いに示されるように、立て込んだ建物のあいだに形成される多角的な街路と人の動き、個々の事物を微細に判別する必要性などに着目すると、踏み固められた「道」は多方向への進路が潜在する「街路」よりも進路を類推しやすい。巡礼者が「街路」よりも「道」を好むのは、彼らがさまよう「自由」や即興性を求めているのではなく、個々の事物をひとまとまりのものとして理解し、類推をはたらかせて歩く志向を裏づけている。

3 路上の諸物との遭遇

3-1 ランドマーク

さらに接近して、道にある小石に目を向けてみよう。それらは、巡礼者の動きとともに多様な形状を成す。道沿いのところどころには、巡礼者らによって配された小石が見られる。その形状は円錐形や矢印が多く、ハート型や十字架もある。また、BurgosとAtapuerca間にある標高1,000mの丘の上には、直径約100mにわたって小石が渦巻状に並べられている。小石の山は舗装路の真ん中に並べられることもあり、車に轢かれたり蹴り壊される。巡礼者のなかには、矢印状に形成された小石の堆積に対して思い立ったようにそれが大きくなるように小石を積む人もいる。円錐状の小山（ケルン）に対しては注意深くその上に石を載せる。そのケルンが人の背丈を超えるものや頂部が尖っている場合は、近くにまた新たなケルンを形成するように石を置く。嵐のときにはそれらは崩れ落ち、より大きなケルンの土台となる。17世紀には、これら小石の山は道標の役割を果たしていたようである。ポローニャ出身の司祭D.ラッフィは次のようにサンティアゴ巡礼の経験を記録している。「困っている巡礼者に良いことを教えてあげよう。2つか3つに分かれた道を前にしてどれが正しいかわからなかったら、路端に2、3の石の小山があるほうに沿って行けばよい」[Laffi 1997:142]。

しかし近年、近隣の住民やアソシエーションによって整備されたカミーノには道標が十分にあるので、小石の山は以前ほど後続の人への道しるべとして機能しているわけではない。興味深いのは、見通しが利きすぎる平原において、ケルン状に積まれた石のそばで荷を降ろして一息つく人や、用を足す人を見かけられることである（写真6）。その意味で、



写真6 ケルンは平らな高原（meseta）にもある。その前で立ち止まる人もいる。

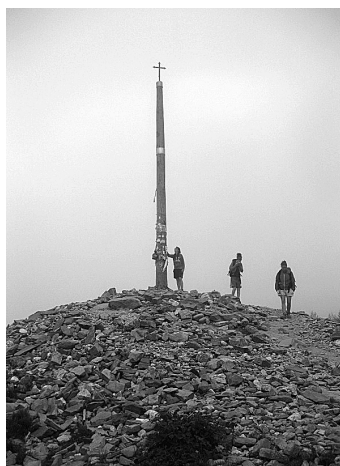


写真7 通過する人の投石によってできた小山、クルス・デ・フェーロ。

現在でも巡礼者にとって何らかのランドマークであることに変わりはない。

積み石のなかでもガイドブックなどで紹介され、巡礼者が造ったモニュメントとして写真におさめられることが多い小石の山が Foncebadón と Molinaseca 間のイラゴ山（Monte Irago）（標高1,500m）の頂きにある。底面幅約15m 高さ約5m のそれはクルス・デ・フェーロ¹²⁾（La Cruz de Ferro）とよばれる（写真7）。山頂を通過する際に石を投げた先史時代のケルト人の習慣に始まり、ローマ時代にも投石の習慣は続き、神話に登場する商業神であり旅人の守護神メリクリウス（Mercurius）を称えて「メリクリウスの山」とよばれていた。12世紀には隠修士ガウセルモ（Gaucelmo）によって石の小山の上に十字架¹³⁾が建てられ、その小山の呼び名は「鉄の十字架」とキリスト教に関連づけられ現在に至る。紀元前から石が投げ置かれていたという史実は巡礼者のあいだであまり共有されていないが、この場所で石を置く慣習があることは広く知られている。出発前に何らかの方法でサンティアゴ巡礼の慣習を知っている人は自宅から持参した石を、道中で誰かからその慣習を聞いた人はその場にあった石を手に取りここに置く。それらは小指の爪ほどの大きさから5kg 以上まで、形状や色も多様である。巡礼者でなくても道脇に車を止めて石をつかみ、小山に向かって投げる人もいる。

路傍に点在するケルンとは異なり、道の真ん中にそびえるクルス・デ・フェーロは巡礼者の進路を妨害する。横脇に舗装路があるので迂回することもできるが、多くの巡礼者は、あえて足元のおぼつかない小石の山を両腕やストックでバランスを取りながら登り、持ってきた小石などを任意の場所に置いて降りていく。

1940年代に L. バスケス・デ・パルガラによって撮影されたクルス・デ・フェーロは、尖頭に十字架のついた15m ほどの木柱が小山から一本斜めに突き出ているといった風情だが [Vázquez de Parga et al. 1949: plate XCVIII], 2007年にわたしが撮影したクルス・デ・フェーロには、家族の写真、瓢箪、国旗、帽子、ハンカチなどが柱の下部にびっしりと括りつけられている（写真8）。2009年に撮影した写真には、周辺から採ったと思われる植物やアルミ箔で作られた十字架、年月と名前の書かれた石、日本の社寺のお守り

などがある。石以外はゴミだとして、車で来て清掃する巡礼経験者もいる。ガイドブックの著者 P. ナダルは、かつては神聖な小石¹⁴⁾の山だったのに、近年では汚れたトレッキングシューズやタバコの空箱などが置かれて汚い場所になってしまった、巡礼の精神が歪められてしまった、と嘆く [Nadal 2008]。

その小山を歩くときの足取りは雑多なものの上でバランスを取るために制約され、平坦な道での歩き方とは異なるアドホックな動きを強いられる。小山には道らしき足場もあるが、それにも拘らず自身の携行物をどこに置こうかと小山の斜面を巻くように歩く人も多い。そこでは身体の動きと置かれたものとの不断の交渉があり、「感覚的アフォーダンス」(sensual affordance) [Edensor 2008:130-133] が生じている。感覚的アフォーダンスとは、身体が一時的に諸物の形態に埋め込まれると同時に、新しい動きや場所のかたちが創造されることを指す。巡礼者は、足元の石が崩れ出せば別の地点にストックや足を置く。石の下に敷かれた写真付きメッセージを読もうとして手をつく。持参した国旗を柱に括りつけようとしてつま先立ちになる。配置された事物の形状や、持参したものに込めた想いに行為を合わせると同時に、行為が事物の位置に変化を与える。このような身体の動きと置かれたものとの場当たり的な関係は、過去の経験から現在の行動を「適切」なものへと調節をするという生態学的心理学(アフォーダンス)の見方とは異なり、自発的に異なる物的環境を探索し、同時に環境に変化を与える¹⁵⁾¹⁶⁾。

クルス・デ・フェーロを遠くから見ると、数世紀のあいだほとんど変化がないように見えるが、近づけば通過する人々によって次々と変化が加えられていることがわかる。ガイドブックの解説やサンティアゴ巡礼研究の言説に見られるように、そこへ石を置くことは心のなかにある重荷や罪を解放すると解釈することもできるかもしれない。だがそれだけならば、あえて小山に登らなくてもできる。思い出の品から不要なものまで巡礼者が持ってきたものが置かれた場所で、巡礼者はかつて多くの人が通ったこの場所を自分自身も通ったのだという実感を味わうべく、足場の悪いところに行って自分のものを置くのである。それは「わたしの経験」は、「わたしだけの経験」ではないはずだということを体感する行為であるとも言える。「見栄えの劣った」現在のクルス・デ・フェーロだが、これを背景に記念撮影する人や歌を歌ったり涙を流したりする人は絶えない。このように、遠くから眺めるのではなく、事物と接触することによって、個々の記憶は、昔や遠くの誰かとも関わりある目印へと変化していく。こうして今日も小石などが置かれた山は、刻一刻と形態を変えながらも現在の行動に変化を与えるランドマークとなっている。

巡礼者によって運ばれた石は、建物になることもある。O'Cebreiro の30 km 東に位置する Villafranca del Bierzo にある巡礼宿アルベルゲ、アベ・フェニックス (Alberge Ave Fénix) は、そのひとつの例である。この建物は建築当初の1970年代から1990年代のあい



写真 8 クルス・デ・フェーロ。
柱の下部拡大。



写真9 Villafranca del Bierzoにあるアルベルゲ、アベ・フェニックスの外観。

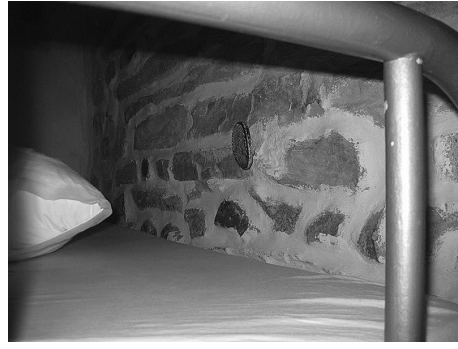


写真10 何かのハス口が出ているアベ・フェニックスの寝室の壁。

だに3回焼け落ち、オーナーであるヘスース・ハトの「有機的建築」(bio-construcción)の方針のもと、おもに通りがかりの巡礼者、ドイツやブラジルのアソシエーション、ヘスースの信奉者らによってその都度建て直された。今ある建物の外壁の多くは、カミーノ沿いやヨーロッパ各地の建物や路傍にある石を巡礼者が持ち寄って造られたものである。その外壁には、カミーノ沿いの遺構、ベルリンの壁などの砂礫も含まれる。それ以外にもコイン、新聞紙、巡礼者のプレスレットなども埋め込まれている。この巡礼宿は、2009年現在もなお、ヘスースや巡礼者らによって増改築され、風変わりな外観を呈している(写真9)。目地で整えられた石壁の脇で、長い木が屋根から垂れ下がった庇を支えている。外の洗濯場の前の壁の目地からは、洋服の布地らしき素材が透けて見える。わたしが寝たすぐ脇の壁からは、ジョウロかシャワーのハス口が2段ベッドの上段に向かって飛び出していた(写真10)。そのことについてヘスースに尋ねたが、それが何のためのものかは知らないという。繰り返し訪れる巡礼者のなかには、通りがかるたびにこの建物の変化を撮影する人もいる。

ここまで見てきたように、ケルンでも小石の山でも建物でも、巡礼者らによって遺されるものは、方々から集められ、アレンジが加えられたり、取り除かれたり、塗り替えられたりする。形状を変えながらランドマークを形成し、カミーノにおける目印となる。これらのランドマークに共通していることは、玉石混淆による怪しさがあり、現在・過去といった「時」に対する階層秩序が崩壊していることである。こうした呪術的とでもいうべき場所は León や Burgos などにある壮麗な宗教建築とは異なり、誰によっていつ造られたかという史実はあまり意味をもたない。過去の必然性は担保されつつも、現在において新たな形態が作られ続けている。

また、大聖堂のような建造物と積み石でできた事物の対比は、叙事詩と小説を対比的に論じた M. バフチンの考察と重なる。バフチンが論じる芸術の形象としての叙事詩の特性と、巡礼者にとってのカミーノ沿いのキリスト教建築には次のような特徴がある。完成したものであり、様式美と規範がある。始原は理想化され、終末はそれよりも陰鬱なものという「時の階層秩序」がある。完了した過去とそこを訪れる人の時間は分断され、その乖離が維持されるような仕掛けによって過去の崇高さが前面に出される。他方、バフチンが論じる小説と巡礼者による積み石でできた事物の特性は、叙事詩が完了したものとして様

式化してうたう過去が、より親密な同時代的現実の水準に格下げされ「未完結の現在にひしめいている諸現象と接触を保っている」¹⁷⁾ [バフチン 1982:249]。したがって、巡礼者が遺したものによって形成されたり清掃されたりするようなランドマークは、過去や未来と分断されていない未完結な現在をたたえ、それゆえに怪しげで統率性がなく、崇敬の対象にはなりにくい¹⁸⁾。

この2つのランドマークはまた、傑出したものと局所的なものに分けられ、それらの相補的なはたらきが、巡礼者に方向感覚と進路を与える。大聖堂は傑出したランドマークである。それはとりわけ町の外から目立ち、方向感覚を与え町の象徴と理解されるが、それに接近するための手がかりを与えるものにはならない。他方、局所的なランドマークである積み石などは、限られた場所でしか見かけることがなく見逃されやすいかわりに、反復的に現れるシーケンスとして把握されることによって進路の手がかりとなる。傑出したランドマークは歴史的連想と視覚に作用し、局所的なランドマークは身体活動に対して無媒介に作用する¹⁹⁾。

ここで強調したいのは、巡礼者は「叙事詩的」で傑出したランドマークと「小説的」で局所的なランドマークとを貫いて移動するということである。巡礼者は、不規則に現れる積み石などをたどりながら、PamplonaやBurgos, León, Astorgaにある大聖堂脇を通り、最終目的地であるサンティアゴ・デ・コンポステラの大聖堂を目指す。捉え直せば、崇高さを保ち「方向感覚」を与える巨大建築のような「叙事詩的」ランドマークと、反復的なシーケンスを形成し「進路」を与える小石の山のような「小説的」ランドマークの双方があって初めて、カミーノを歩き始めた巡礼者が何日も歩き続けることができると言える。

遠くには壮麗なものが建造され、道端には怪しいものが作られる。作られたものは壊され、置かれたものは動かされる。それらが人を歩かせ、徒歩移動によって何かがかたち作られる。身体と諸物の相互作用が徒歩巡礼の継続を可能にするランドマークを形成し、離れた時間や場所の断片が結びつけられる。

3-2 個別的な慣習的实践と「構う」こと

春から晩夏にかけて、夜明け前にアルベルゲを出発すると、静かで涼しい空気のなか、歩く距離を稼ぐことができる。午後1時を過ぎると、場所によっては強烈な日差しのなかを、水分摂取と体力の消耗とアルベルゲの満室に気をつけながら歩かなければならない。規模の大きい公営アルベルゲは多くあるが、各国語のガイドブックで比較的同じ行程を提案しているので、たいがい午後4時前には満室になる。夜10時過ぎに夕食を食べ、寝つくのが遅い人や、ほとんどの巡礼者が出発した後にベッドから出るような人は、午前5、6時前にアラームを鳴らし、朝食もそこそここに出発する人の行動を「いかれてる」「軍隊のようだ」などと揶揄する。他方、夜明け前に出発することは薄暗く静かな道を歩けることであり、日中とは違う光景を堪能できる良さもある、と「早起き組」の巡礼者は言う。「早起き組」の目的はベッドの確保や距離稼ぎだけではないようである。

しかし朝早く、薄日の気配すらないときに村から出発する場合には、ナメクジに気をつけなくてはならない²⁰⁾ (写真11)。そのナメクジはスラグ (slug)、バボーサ (babosa) など



写真11 スペインナメクジ。カミーノで見られる平均的な体長。下はトレッキングシューズの先の部分。

一般名称でよばれるが、外形には際立った特徴がある。体表は黒く外套膜より後ろは無数の襞で覆われ、体長は10 cm ほどになる。このナメクジが明け方になると、道端の草むらから道を横ぎるように大量に現れる。場所にもよるが、たとえば目にとまりやすい農道であれば、一步ごとに1, 2匹といえは伝わるだろうか。その後、日が昇るとともに、それらは巡礼者からは見えないどこか草むら辺りへ消えていく。たとえば、誰よりも早く出発したがっていたわたしの同行者が、ある朝、もう少し明るくなってから

出かけようと言うので、その理由を聞くと、ナメクジやカタツムリを踏みたくないからだと言う。潰したときの鈍い感覚は靴裏にしばらく残る。ナメクジなどの出現によって足元に気をつけて歩いたり、暗い時間から歩くのをやめて辺りが明るくなってから出発したりする巡礼者もいる。小さな生物の日周期的活動が巡礼者の行動に変化を与える。

カミーノにおける環境保全についてのフィールドワークをしていたメルセデスは、ナメクジやカタツムリなどの軟体動物が道を横断することに気づき、それらを道端に逃がす自身の行為を次のように記している。

手を差し伸べるという最初の経験は Zubiri への道で突然起こった。この日わたしは早朝の1, 2時間に小さな生きものが歩道を横断していることに気づくようになった。その多くはゆっくりと動き、巡礼者の足で、ウォーキングスティックの先で、自転車のタイヤで潰されていた。わたしは特に何も考えもせず、この生きものをつまんで道の外側へ置いた。一度やり始めたらやめられず、この行為は朝の日課になった。それは日差しが強くなる前の道が朝露でぬかるみ、カタツムリやナメクジやミミズが現れる1, 2時間だけのことだった。考えてみれば、立ち止まって膝をかがめて重いバックパックを背負った体でこの小さな生きものを動かすのは、体力を消耗するし時間の無駄に違いない。でも一度この生きものたちに気づいてしまうと、人の通る場所から退かすのが自分の務めのような気がするようになった。そのような朝のあいだ、他の人はわたしの脇を通過し、わたしが何をやっているのかと聞こうとすることもなかった。(中略) 自分の行動の理由はよくわからないけれども、確かなことは、一度その生きものに気づいてしまったら、そういう朝の日課をしないのは適切でないような感じがしたということだ。

このように1日を始めるというのは、わたしの道での毎日に、ある種の変わらないようなものを与えてくれたような気がする。この行為は、ゆっくり行こう、巡礼を急がなくてもいいのだし巡礼などしなくてもよいのだ、ということを気づかせてくれた [Quesada-Embid 2008:34-35]。

道を横ぎる生きものは、あるときは無視され、あるときは行動様式を変える契機となり、別のときには、旅という変化の連続のなかに「変わらないようなもの」を与える手助けもする。

ここで、メルセデスのナメクジを退かす行動に着目したい。潰されるナメクジに気づいて始める面倒を伴う日課は、移動する身体と場所の諸物との推移的な関係に、ある種の安定性を与えている。そこでは、地上には人間以外の生きものや死が存在することに気づき、それらを大切にするという、まさにハイデガー的な意味での「住まうこと」が展開している（Heidegger [1971] を参照）。混沌とした世界の諸物のなかから選択的に濃密な関係を結ぶことを繰り返し、別のものを無視していく。このような反復を通じて、一步ごとに変わる全ての光景に気を向ける必要がなくなると同時に、選び取った事物との周期的な遭遇のなかに「混乱せずに変化する現実」が立ち現れる。カミーノでは、上のナメクジの例以外にも、移動の途中に特定の事物と特殊な関わり方をするを自分に課す様子が見える。ある巡礼者は1日1枚の鳥の羽を拾うことを日課とし、少し恥ずかしそうに、袋にいっぱいになった鳥の羽を見せてくれた。別の巡礼者は教会の堂内で試みに歌ってみた経験を気に入り、道沿いで見つけたすべての教会の内部でひとつ持ち歌を歌うというきまりを自分に課していた。それらは何らかの発見と衝動から始められ、面倒を伴い、傍からは滑稽にすらみえる慣習実践である。このような個別的な慣習実践は、N. ラポートが人間の本来的な性質の一部として見出しているように[Rapport 2007]、(所与の表象、言説、役割演技などの) 周囲が与える方向付けを意に介さない²¹⁾という作用をもたらす。つまり、特定の事物との関係を周期的かつ濃密にすることで、巡礼者という集合性に完全に回収されない存在でい続けることが可能になる。

メルセデスの行為をよりの確に説明するためには、「構う」という日本語が適していると思われる。構うという言葉は、打ち消しの表現を伴って用いられることが多いように、気にせず通り過ぎる人々がいる状況で、何かに特に意識を向け、それと関わりをもつために立ち止まるときに使われる。「構うこと」は、大切にすること、付き合うというニュアンスがある。その意味ではハイデガーの意味する「住まうこと」と「構うこと」とのあいだに接点があるように思える。ハイデガーによる「住まうこと」という概念には、もののあいだに留まること、死すべきものが地の上にあり、それをいたわることが含まれる[Heidegger 1971]。メルセデスは、巡礼者の集合的運動とナメクジの周期的運動が交錯する朝、周囲の巡礼者が気にもとめないことに構う。他の巡礼者が自分のやっていることをどう見るか気にしつつも、朝の1、2時間、しゃがんだり立ったりの奇妙な反復動作を毎日繰り返す。「構う」対象が害虫か保護対象かといった有用性の問題はメルセデスにとってはどうでもよいことである。そうした特定の価値や意味が与えられたものだからではなく、



写真12 夜明け前のピリャバンテ付近の道。右端は、サンティアゴ・デ・コンポステラへの道を示す道標。

その場所にある生きものの固有のリズムがそのまま保たれるよう「構う」ことがメルセデスには重要なことなのである。メルセデスが「わたしの道での毎日に、ある種の変わらないようなものを与えてくれたような気がする」というのは、ナメクジを踏みつぶす集合的運動から自分の運動を部分的に切断し、他の生きもののリズムに自らの運動を合わせることを日課にすることを通して、連続的な移動のなかに安定した世界を獲得する実感を言い表している。

このような有用性の枠組みから外れた「構う」ことはすなわち、集合的实践における個別性の確保として捉えることができるのではないだろうか。カミーノでは、鳥の羽を集める人や教会で歌を歌う人がいるように、特定の事物の現れを「構う」習慣が多様な形態をとって観察される。より正確には、構うことを自らに課す様子がうかがえる。これらの例はいずれも、何らかの気づきや衝動から始められ、面倒を伴い、しかも実用的ではまったくない。路上に出現する生きものや事物を自らの都合に合わせるよう仕向けるのではなく、路上の事物の出現に自らのリズムを合わせていく。行為がしばしば滑稽な様相を呈することも、方角や進路を一にする巡礼者集団に絡め取られることのない個別的な慣習実践を可能にする。そうした（集合的实践に部分的に従いながら、それに覆い尽くされることのない）多様な個別的な慣習実践あるいは癖（habit）は、カミーノという旅の途上において存在する＝住まう（inhabiting）ひとつのあり方であるように思われる。

3-3 平凡な動きが作り出す出来事

多様な生きものの動きは法令、宗教、社会的事件、歴史など人間が施した各々のシステムのフォーマットを通り過ぎていく。ここではその具体的な事例として野良犬の動きがそのようなシステムを透過して出来事を引き起す様子を、相互応答性と偶発性に引きつけて検討したい。

スペインでは、1999年に危険性のある動物（特に犬）の管理に関する法律が制定され、自治州の環境課、農村環境評議会、動物飼育センターなどの管理に基づき、犬の飼育方法について細かな規制（条例 ²²⁾ orden 法令 ²³⁾ decreto）がある。多くの州では、2000年以降、所有者は危険性のある動物全てにマイクロチップを埋め込み、首輪をつけ、柵高2m以上のなかで飼育し、公共の場では2m以内のリードに繋がなければならないことが法令で義務付けられた。²⁴⁾ だがカミーノ沿いでは、その法令が機能している様子はほとんど見られない。そもそも野良犬は州境などに関せず移動するものだから、自治州ごとの法令の力もおおよそ高いとはいいがたい。住宅街の軒先では、飼い主がどこにいるかもしれず寝そべる犬の頭を人々がときおり撫でていく。農道などでは、犬はカミーノ沿いを小走りに向かってきたり、巡礼者を追いかけて、追い抜いていく。その大きさは20cmに満たない子犬から、周辺の家畜のヤギの背丈に迫るものまでいる。家の敷地内を駆けまわるものもいれば、野良犬もいる。首輪をしていない飼い犬も多いので、はぐれ犬なのか飼い犬なのか巡礼者には見分けがつかない。彼らを巡礼者 peregrino と犬 perro にかけて、旅する犬 perrogrino とよぶ人や、田舎の遅れているところは犬が愛玩動物ではなくて番犬という点だと説明するスペイン人巡礼者もいる。各国語のガイドブックでは犬の行動傾向や危険な箇所などに

触れ、注意を促している。²⁵⁾ドイツ人の多くは、犬は鎖で繋がれるべきでないと語り、日本人は「野良犬」の多さに驚く。わたしが首輪のない犬に右足を噛まれたとき、病院まで運んでくれた牧畜を営む男性は「スペインの村々の犬は昔から、泥棒や危険な動物から飼い主を守り、牛やヤギの群れをまとめてきた」と言った。巡礼者と犬との遭遇は、犬という生物個体の出現に還元できるものではない。各々の土地における犬と人の関わり方や、それまでの巡礼者の犬に対する態度などが複雑に交錯する局面でもある。しかし、犬と人がその土地においてどのような関係にあるかなど、通りすがりの者には知りようもない。であるからこそ、生きものの動きは、巡礼者の安易な見とおしを許さない遍歴経験をささえることになる。それを明示的に説明する例として、犬に遭遇した2人の巡礼者のエピソードを見ていこう。

ひとつめは、ケニア出身のイギリス人エリアスが、犬を通じて類似した経験をした男と会ったときの語りをまとめたものである。ふたつめは、第二次世界大戦後にドイツで最も売れた書籍として知られるコメディアン、H. カーケリングのサンティアゴ巡礼日記から、²⁶⁾ふいに現れた犬を前にしてペルーのクスコからのシャーマンとの関係に変化が起こった様子を抜粋したものである。

エリアスとわたしは、道中で顔見知りの関係だったが、ゆっくり話をしたのはサンティアゴ・デ・コンポステラに着いた後だった。わたしが、嘘みたいな話だけれど、村人から犬をもらったので、巡礼を途中でやめてフランスに連れて帰った人がいたらしい、と言うと、エリアスは、その人に会ったと言った。彼は、頭痛でバルの2階の宿で連泊しようとしたときに外で犬の吠える声を聞いたことから話を始めた。

犬の声がうるさいから窓が開けっぱなしなのかもしれないと思った。窓が閉まっているかを見に起きたら、犬の鳴き声が止んだ。下を見るとジャン（エリアスと道中で知り合ったフランス人男性、エリアスは彼が先に行ってしまったものと思っていた）の手の先に犬がいて、吠えていた犬と鼻をつけていた。ジャンは、道端の老人に呼び止められ、犬を手渡されたので、一緒にサンティアゴへ向かおうとしたけれど、犬が逆方向にしか行こうとしないから、サンティアゴに行くのはあきらめてフランスへ踵を返すことにした、と言った。僕はそんなことはありえないだろうと言うと、ジャンは、出発するときから起こることを全部受け止める旅にすると決めていた、と言った。それから彼は10年もの来し方を話し始めた。彼は1998年の8月に事故で妻を亡くしたと言った。僕は、ちょうどそのころ、弟をナイロビの大使館テロで失った、と言った。彼も僕もちょうど同じころから、いかに苦闘の10年を過ごしてきたかについて語りあった。

ドイツ人コメディアンのカーケリングは、初老のペルー人シャーマン、ルコ・ウルコと道端で出会った。ルコ・ウルコは巡礼の理由をスペイン語で言った。友人の癌を治すためにマドリッド周辺でしか手に入らない薬草を求めてクスコからやってきたが、カトリックの秘密組織がその植物を根絶やしにしてしまったため、しかたなくサンティアゴ巡礼をす

ることにした、と。それを聞いてカーケリングは、ルコ・ウルコは頭がいかにれていると思
い、引き離して歩くタイミングを見計らっていた。

突然、牧羊犬が一匹、道の横合いから現れた。まだ若くてえらく人なつっこい。足に
まとわりついてきたので、僕は撫でさすりながら、ドイツ語で「おい、こらおまえ、
名前は？ かあわいいなあ」と言った。ちょっと間の抜けた、子供が節をつけて歌うと
きのような喋り方になっていた。と、ルコ・ウルコまでが、同じようにその犬に向か
って、僕がいま言ったばかりのフレーズを、ドイツ語で、僕の喋りそのままに訛りも
なく、録音機のように繰り返した。年取ったオウムみたいに。それから、僕に向かっ
てにやっと笑って見せた。いかにも僕の反応を窺っているふうだ。僕はぶるっと震え
が来て、鳥肌が立った。薄気味悪くなった。「ドイツ語喋れるの？」そう訊ねる声か
かすれていた。「ええ」答えはもうドイツ語ではなかった〔カーケリング 2010:222-
223〕。

それを機にクスコのシャーマンを名乗るルコ・ウルコは、カーケリングの身体の使い方
の問題点を指摘し、自宅で猫を飼っていることを言い当てるなどして、次々とカーケリ
ングを動揺させていく。動転したカーケリングはルコ・ウルコに怒鳴り、その前を立ち去る。
その後カーケリングは、胆嚢除去手術をしたことが巡礼のきっかけのひとつだったこと、
怒りを我慢することが胆石性腹痛の原因になることを思い出す。

エリアスの語りを、苦しみや現実を他者と共有することで「癒し」が経験される（たと
えば Michalowski & Dubisch [2001]）といった、「聖地へおもむく旅」の文脈に置きな
おして捉えることは不十分だと思われる。エリアスの頭痛、階下の騒音、犬の吠え声、道
端の老人からの犬の「プレゼント」、ジャンの引き返しという、個々のもくろみを超える
動きが「聖地へおもむく旅」のドラマトゥルギーを超えているからである。エリアスとジ
ャンの10年は、テロと事故という社会的重要度や、ケニアとフランスという地理上の隔た
りは考慮されることなく、シュルレアリスムに並べられる。犬を含む諸物の運動が互いに影響
を与え合い、サンティアゴへ無事に到着する計画をくつがえし、それがまた関係に新たな
バリエーションを引き起こす。

カーケリングの場合、犬の登場、驚異的な口真似と動揺させるようなルコ・ウルコの物
言い、胆嚢を患ったカーケリングの身体などが複雑に絡み合っている。そこではペルーで
知られる民間医療体系²⁷⁾と「西洋」の身体、旅先（スペインの巡礼路）と自宅（ドイツ）な
どの社会文化的差異は宙吊りにされ、新たな世界が動揺とともに展開していく。よりま
とに歩こうとするカーケリングの企ては、はぐれ犬の登場からさらに攪乱される。カーケ
リングにとってのまともさの枠組みは揺らぎ、攪乱を経て、新たな理解へと向かう。事物
との一見平凡な関わり合いが次々と偶発的な出来事を引き起こし、そのおかげで移動する
身体は良かれ悪しかれ、定式化されたものの捉え方から解放される。ある人はそれを「神
秘的・霊的体験」とよぶかもしれないが、強調されるべきは、身体、生きもの、道などの
路上の多様な事物の相互応答的で偶発的な関係が、そうした不可思議な経験をもたらすと

いうことである。

4 主役不在のストーリー，一回的経験への意識

ここまで、多様な巡礼者の経験を結びつけるランドスケープについて、巡礼路上におけるさまざまな事物との遭遇によって生じる相互応答性と偶発性に着目しつつ、いくつかの事例を用いながら具体的に徹して検討してきた。生きものや路上の事物のささいな動きとそれに伴う多様で直接的な関わり合いがリズム（拍・律動体験）を引き起こし、事物の形態に変化を与え、時の階梯秩序を壊しうる。身のまわりの事物との周期的で個別的な関係を立ち上げるにより、定住していなくとも、「場所に住まうこと（inhabiting）」が可能であること。

ただし、ここまで見てきたようなランドスケープは、ベルクが想定していたような、集合的なもの、象徴的な「風土性」を形成するとは限らない。各々のタイミングで引き起こす運動は個別的経験ないし一回的経験として記憶されることもある。巡礼者の旅行記（日記）はそれを把握するうえでひとつの手がかりを与えてくれる。

フィールドワーク中に親しくなった巡礼者のうち、日記をつけていた5人に、それぞれ5日目、10日目、25日目を抜粋²⁸⁾してもらった。本稿で引くのはピレネー山脈のフランス側、Saint Jean Pie de Port のアルベルゲで同室だったリシャルドのものである。近年、各国語で出版されるサンティアゴ巡礼のガイドブックは Saint Jean Pie de Port を出発地点として紹介しているので、わたしはそこが「旅立つ」多くの巡礼者の話を聞ける場所だと思い込んでいた。しかしじっさいにそのアルベルゲに宿泊した十数人の夕食のうち「旅立ち」の晩餐となったのは、わたしとオランダからの若いカップルだけで、それ以外の同宿²⁹⁾の人は、すでに何百 km も手前の自宅などから歩いてきた人たちであった。以下に紹介するのは、心理療法士を引退し、十分に時間的余裕のある60代半ばのリシャルドが、旅のあいだに吹き込んだ IC レコーダー音源と手帳に残したメモを整理し、ひと冬かけてパソコンに打ち込んだものである。彼はアムステルダム近郊の自宅から歩いてきたので、25日目になってもフランス国内を歩いている様子が書かれている。

リシャルドの日記

4月2日木曜日（2009年、25日目全文、原文蘭語、本人による英訳を筆者が和訳、〔 〕内は筆者）

Bar-sur-Aube から Chatillon-sur-Seine

ラジエーターのスイッチは壊れていた。洗濯物は乾いていた、〔 〕でも部屋は亜熱帯のようだった。窓を開けたまま寝た。7時半にクロワッサンとパンとコーヒー、8時5分に出発。宿の従業員が、GR〔欧州長距離歩道〕まで車に乗せてくれると言う。パイロンテレコムまでちょっとした坂。砂利が足元を滑らせる。Ferme-Haut-Pays の近くでとても静かな夕食をとった。なかなかいい道だ。あそこでは32 km を歩いた。

今日それをやるにはすばらしい日だろう。寝るところがない。17時30分。閉まっている。次の町に望みをかける。バーでコーラを飲み、寝られそうな場所を聞く。試しに訪ねてみたその家はクリスチャンだった。何回かベルを鳴らすが、反応はない。農夫が道を通りかかり自分の土地ではキャンプしないでくれと言う。Brion-sur-Ourceで靴にあるものを食べているとき、アニタ〔リシャルドの妻〕から電話がある。すごく疲れた。Chatillon-sur-Seine まであと 9 km, そこならたぶん良い寝場所があるだろう。暗いなか、車どおりの激しい道の左端を歩く。車の光で目が眩む。2人の係員がスピード防止帯を設置しているのだろう。彼らは反射布のついたわたしのスティックとバックパックを見て、わたしに「良い道を」と祈る。

思い返せば、わたしは完全な静寂に意識を向けて歩きたいのだった。今、腕と足とスティックの動きはある流れのなかにある。Chatillon の町境に入るとそれが止まった。ひとりの女性がホテル前の道を教えてくれる。その宿は閉まっている。キャンプをすることにした。幸運にも道を知っている。階段を上り、教会を通過する。ほかにもキャンパーがいる。21時40分にほぼ幕営の準備を終えたことをアニタに電話する。明日はシャワーを浴びてゆっくりしよう。

リシャルドの、実際に起きていることを受け止めてエピソードを形成するような動きに着目したい。暑苦しい思いで起床してから一息つく幕営まで、ラジエーター、洗濯物、クロワッサンとパンとコーヒー、宿の従業員、ベル、農夫、妻のアニタ、車のライト、階段、教会などがつぎつぎとイメージとして立ち現れる。そしてプロットののないストーリーが語られるように、反俯瞰的視線が、過去から現在へという時間の流れを含みながら、ときどき時間が戻ったり、(cm, km, h などの) 度量衡で括られる物理的範囲を自在に超える。意識は自分自身に向けられると同時に外へも向けられ、さらにスピード防止帯の工事をしている人の側からの視点にも成り変わる。移動するリシャルドの身体とそれを取りまく事物の両方の働きかけが、ある種の特徴ある視点の運動をつくり出しているのだ。

徒歩や巡礼の道程、祭りの行進^{パレード}などを、語ること narrating/storytelling と関連づける議論は多い。一步の繰り返しが経験を作り、文節の連続が文脈を構成するとして徒歩も物語も相関しているという議論 [Berger 1995] や、祭りの行進に参加し時間と場所を共有することが新たなエピソードを共作とするもの [Lund 2008], あるいは人の移動は宗教圏を地上に具現化していくことであるという主張もある [Bhardwaj 1973; Sallnow 1987]。発話が言語体系を構成するように、徒歩が権力的視座によって制約された空間を創造的なものへと変革するという見方もある [ド・セルトール1987]。ただし、これらの議論に類似しているのは、硬直した世界を打ち破るように物語の主題を牽引していく「主役」のはたらきについての指摘である。それはとりわけ「周縁」に生きる人々をテーマとする研究で注目される、集合的、反復的、そして凡庸な実践によって社会構造を変革するエイジェンシーの概念と重なる。

しかし、本稿で述べてきた視点の移りかわりを、語ることに結びつけると、次のような異なる見方もできるだろう。移動する身体は作者／駆動者 (author) であり、それなくし

てエピソードも生まれない。しかし、それは物語の主題を牽引するヒロイックな主人公ではない。巡礼者も遭遇する事物も、いわばプロットのないストーリーの変数のようなものである。食べ物が鞆に入っていなければ、リシャルドは Chatillon-sur-Seine より手前で歩くのを止めたかもしれない。アニタから電話がなければ、リシャルドは自身の疲労に気づかなかったかもしれない。宿が開いていたら、リシャルドはそこでシャワーを浴びたはずだ。

不慣れな場所に行く徒歩巡礼者の世界は周囲との即興的な関わり合いによって展開していく。その多くは通過されるが、そのいくつかは名付けられ、日記に記録されたりもする。たえず身体が外界にさらされ、音や輪郭があるものや触れるものが身体の移動とともに現れると同時に、現れる事物は巡礼者の次なる行為を誘発する。

「もの」と「身体」とが相互的に関わり合う様子は、どこかでアフォーダンス理論と重なる³⁰⁾。しかしここで注目したいのは、ものと身体のあいだに内在する関係ではなく、身体の動きとそれにともない立ち現れる路上の諸物との推移的な関係である。アフォーダンス研究の、事物が人の行為を誘発するという視点はたいへん興味深い。だが、歩いて移動する巡礼者が特定の事物と関わり続けることは少ない。したがって、焦点を合わせる範囲を移り変わる諸々のものや動く身体へと広げる必要がある。特定の事物と身体の関係の原理や定常的性質を読み解く視点では見逃されがちなことだが、ここまで言及してきた即興性や偶発性は、つきつめると、その出来事を二度と経験することはできないということであると言える。日記において一日の出来事がつづられるのは、それが一回的なことだからという意識の表れにほかならない。じっさいに日記をつけるかどうかはともかくとして、徒歩のペースで進むことによるプロットのないストーリーの変数一つ一つに意識が向けられること、すなわち一回性への意識が、巡礼者の経験を結びつけるランドスケープのひとつであると考えられる。

5 「ふるまい」から触知性へ、あるいは別の歴史へ

ここまで民族誌的に検討してきたことをまとめておこう。巡礼者はハプニングを経験するなかで、「今この瞬間」の詳細が鮮烈に記憶されること。それは行為の連鎖と因果法則から解き放たれる瞬間でもある。また、移動する身体は、場所の諸物と身体の動きの多彩な関わり合いのなかで、崇高なランドマークと呪術的なランドマークの双方を頼りに方向感覚と進路を得ること。さらに、特定の事物と個別的で周期的な関わり方が、目的を一にした集合性——それはファシズムの源泉になるだろう——に覆いつくされることのない、移動しつつ安定感のある世界に身を置くことを可能にすること。徒歩でたどられる世界は、主役不在のプロットのないストーリーのような形態をなしており、一回的な経験であること。

本稿は、展望や展開のうちにある相互応答性と偶発性から地続きなものを捉えることを試みてきた。この試みはまた、人類学の理論的地平に向けてのひとつの冒険も含んでいる。近年の人類学は、人々のミクロの実践をクローズアップすることで、異なる地理的領域や

社会構造を架橋するような理論を提出してきた（たとえば常田 [2011], 関根 [2006], 石井 [2007] など）。そのような議論において照射される実践の多くはしかし、「ふるまい」と特定の意味を備えた事物との関係ではなかつたろうか。

本稿はそのようなミクロな関係を捉える視座を積極的に引き継ぎつつ、重要度の有無や価値を前提としない、ものたちと初めて遭遇を果たしたときの小さな気づきや、連続的な関係性が断たれたときの根源的な気づきにも目を向けてみた。本稿全体を通じて見えてくるのは、事物との接触のなかで偶発的に形成される何かの痕跡やストーリーとしてのランドスケープである。それはいわば、重要な出来事の因果の連鎖としての歴史とは異なる非表象的な「歴史」とも言える。

ベンヤミンはその著作「歴史の概念について」において、次のように書く。「大きなことと小さいことを区別することなく出来事を語り伝える年代記作者は、そのことによって、ある真理を考慮に入れている。かつて起こったいかなることも、歴史から失われてしまったものと見なされるべきではない、という真理だ」[ベンヤミン 1994:329, ただし訳文は仲正 2011 に拠る]。ベンヤミンのいう「年代記作者」の像は、メルセデスやカーケリング、リシャルドのような経験を記録する巡礼者と重なる。彼らはいずれも、不慣れな地で³¹⁾接触した路上の諸物に気づく者である。ふるまうのではなく、気づくこと。眺めるだけではなく、接触すること。そのことによって移動する身体は、それぞれのやり方で、物質的なものと精神的なもの、個人的なものと集合的なもの、昔のことと現在のなこととのあいだを渡り合う。背景よりも展望をとおして、ものに埋め込まれた性質よりも現れる性質をとおして、形象としての歴史をとらえる。カミーノを歩く巡礼者の経験は、同時代の巡礼者の経験と相互応答的な関係にあるだけではない。徒歩によって触知される世界において、瞬間的に現れるかつての人々や出来事の痕跡にも応答しようとするのだ。

注

- 1) サンティアゴ・デ・コンポステラは歴史的にカトリックの主要な巡礼地とされるが、この巡礼路(El Camino de Santiago)を、動力を使わずに行く人の多くは、カトリックの実践者ではない。統計データには表れないが、信仰心の篤い人ほど飛行機やバスなどで目的地へ直行することは多くの研究者から指摘されている(たとえば Coleman [2004], Roseman [2004], Frey [1998], Egan [2010] 参照)。
- 2) 本稿では、特にベルクの「都市性」[ベルク 1993]に関する議論を参照したが、限られたエリアに人口が集中し、都市計画法が敷かれた行政区画としての「都市」ではないことを示すために、彼が都市以外についてしばしば論じるときに用いた「風土性」という語をここで使用することをことわっておきたい。
- 3) 本稿は、フランスとスペインの国境から大西洋岸にわたって延びるサンティアゴ・デ・コンポステラの巡礼路を中心に、2007年から2009年まで、および2011年に行った計11ヶ月にわたる調査に基づいている。調査方法は、さまざまな人と一緒に歩き、食べ、寝ながら、見聞きし、感じたことを記録することを中心に行った。ボランティアや巡礼経験者宅への訪問なども行った。調査言語は、スペイン語、英語、日本語である。本稿で言及する年齢や経歴等は特にことわりがない限り、調査時のものである。なお、広く認知される地名および本稿の論旨において重要な地理的名称以外は、読解上の便宜を考えて、現地語表記を採用した。
- 4) フォトエリシテーション調査は2008年6月から10月まで断続的に行った。

- 5) 調査者が撮影した写真の提示枚数は、インフォーマントの行程に応じて変更された。明らかに通っていないと思われる場所の写真は提示しなかった。調査の不成立を受けて、インフォーマント自身が撮影した写真をもとに語りを聞く、というフォトプロジェクト・インタビュー方式に切り替えた。
- 6) メルロ＝ポンティは、知覚 (perception) が捉えるのは真実ではなく、現前するもの (presence) であると述べる [Merleau-Ponty 1964]。他方、箭内は、比較的静的で安定的な「現前するもの」だけでなく、危うく、移ろいやすい「イメージ」をとらえる意義について論じている [箭内 2008]。フィールドでの「イメージ」を念頭に思考することは、既定の分析概念に回収されない対象の生き生きとした姿を汲み取りつつ、同時に個別的な事象の全体性を主観と客観を結びつけながらより包括的に把握することを可能にするからである。本稿もこの概念を参照し、既存の巡礼理論を更新することよりも、サンティアゴ巡礼における個別的なものとそのあいだを縫う地続きの部分把握することを論の目的とした。
- 7) ここでの偶発性という言葉は田中 [2006] から借用した。田中雅一は、身体がいうことをきかないことを意味する偶発性 (contingency) によって、新たな関係性が展開する [田中 2006] と述べる。「身体」を「生きものの動き」といいかえて意味を拡張することもできるだろう。また、「ミクロ人類学の課題」において田中が指摘した、呼びかけに応答する身体も、本稿全体の議論に深く関わっている。本論文の結論部で示されるのは、身体は、現在そこにいる身体とだけでなく、過去のものたちとも響応しうることである。
- 8) 「北の道 (Camino del Norte)」ではアストゥリアス州のみ貝の記号の意味が変わり、閉じている方が進路を指す。その情報を持たずに隣州のカンタブリアから来た巡礼者が混乱して道に迷うこともある。
- 9) ダビは、20歳前半、マドリッド出身でコンサートの設営スタッフをしていた。巡礼当時は無職。シェナイは、36歳のチューリヒ出身の銀行事務員。父はトルコ人で、長いあいだ連絡をとっていない。母はスペイン人で、約半年前に脳腫瘍で死去。ニコルは、数名の部下をもつ銀行のマネージャー。巡礼は2度目。5月に解雇されたが、別の銀行から採用された。巡礼時は無職。
- 10) この巡礼宿では教会の2、3階部分に巡礼者の寝の場所が用意されており、ベッドではなくマットレスを自分で敷いて寝る。スペインカミーノ友の会連合が運営するボランティアによって、清掃、食事の用意などが行われる。巡礼者は彼らを聖職者と思い込むことが多い。
- 11) ダビはスペイン語と英語を理解し、シェナイは (スイス) ドイツ語とスペイン語とトルコ語を理解し、ニコルは英語とドイツ語を理解し、わたしは英語とスペイン語を理解するという状況で、4人全員のあいだで意志が疎通するのは、いつも少々複雑な手順を踏んでいた。
- 12) 鉄の十字架を意味する。外国語のガイドブックや学術書で用いられる表記はガリシア語の La Cruz de Ferro である。スペイン語ガイドブックではスペイン語 La Cruz de Hierro と表記される。
- 13) 史実に関する出典は数多い。Vázquez de Parga et al. [1949], Frey [1998], Quesada-Embid [2008] などを参照。
- 14) 石が神聖性を具象するものとして家や橋の素材となり、人と場所の関わりに「重みを与える」ものである、という議論に関しては Kahn [1996] を参照。
- 15) 人文地理学者のエデンサーと、ギブソンやリードらの生態学的心理学の視点のあいだには、方法論的な相違がある。アフォーダンス概念を切り拓いた生態心理学は「研究者に分析可能なしかたで構造化された諸領域」について個々のパースペクティブの独自性を認めながらも方法論的普遍主義 (methodological catholic) をとり、特定種のあいだで共通にみられる再現性のある事象を科学的に論じる。そのなかで、世界についての認識 (知覚) は、刺激作用を受けている自分の神経系から独立している、という知覚 (perception) の感覚 (sense) に対する独立優位性を主張する。対して、人文地理学者のエデンサーは、廃墟、タージマハルなど都会における人の感覚・記憶・想像と、物質性との関係を類推的に論じる。本稿は後者の方法論により近い。よって、エデンサーが用いる用語「感覚的アフォーダンス」という語を用いた。
- 16) リード [Reed 1996] は、探索的 (exploratory) 所作は、頭部感覚器官で行為を調整するために

- 持続的に行われるのに対し、遂行的（performatory）所作は、環境物質表面を変化させる相当なエネルギーを要するものとして、ふたつの行為を区別する。
- 17) バフチンは、小説の登場とともに、人々が場所を重要視することになった現象を〈場所の崇拜〉とよんだ。それは、18世紀、叙事詩的世界に対する関心が崩壊し、より有機的な方向へ展開した概念を指す [バフチン 1982]。誰が、いつ、何をしたかの真相（出来事の虚実）よりも、出かけて行けば誰もが触れられること（地理的実在性）のほうが重要であるということである。
 - 18) 既成宗教の対抗軸としてサンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼をニューエイジイズムの範疇に位置づけるという考察もある [Frey 1998; Coleman & Eade 2004; 岡本 2012]。また、ティモシーらが論じるニューエイジイズムの諸概念に共通する具体物の有機的特性を超えた自然性（超自然）への傾倒や、精神的なものを具体物に投影する傾向 [Timothy & Olsen 2006; Heelas 1996] は近代性への抵抗の発露として現れると主張する。だがそれらは、徒歩経験の具体性のなかで展開するサンティアゴ・デ・コンポステラの徒歩巡礼においてはことさら強調されるべき特徴とは言えない。
 - 19) この対比については、都市研究で知られるリンチの論考 [リンチ 2007] を参照した。
 - 20) 本稿で取り上げるナメクジは、スペインナメクジともよばれる、黒色の腹足綱ナメクジ科の軟体動物である。学名 *Arion vulgaris*, *Arion lusitanicus*。一度に400個近く産卵する。一般にナメクジは農作物に被害を与える害虫とされる。とりわけスペインナメクジは他のナメクジ科のものよりも顕著に大きく、さらに近年、イベリア半島だけでなくユーラシア大陸、アメリカ大陸まで急激に生息域を拡大していることが懸念され、環境学、農学などの分野でその生態や駆除方法をめぐって多く研究される生物である (Weidema [2006], Hönemann & Nentwig [2010] 参照)。
 - 21) ラポートは奇妙な慣習に自らの意識を集中させることにより、社会的現実を退けることは、人間に備わる能力であるとし、それが行使されることを「アイロニー」とよぶ。ラポートはまた、「アイロニー」によって、誰にも頼ることができないような凄惨な社会的状況でも生きていく可能性について述べている。彼は、それを示す端的な例としてアウシュビッツ強制収容所からの生存者のひとりの経験談を引いている。その生存者は、収容所という過酷な場所で、「今、ここ」の自分の所作逐一に集中するという規律を発明し、自分に課すことを続けたおかげで生きながらえることができたという。ラポートはそのことを、自己をフェティッシュ化することにより凄絶な社会的現実から逃れ、生存するための現実を生きることができたと読み解く [Rapport 2008]。希望することや絶望することといった他の可能性を考えることを自らに禁じ、自らの身体の動きとその隣接面だけに意識を集中することによって、自らが収容されたユダヤ人であるという意識から逃れ続けることは、究極の「アイロニー」である。
 - 22) スペインの危険性のある動物の飼育規制に関する情報は CIAA *Centro Integral de Acogida de Animales* のホームページを参照。
<http://www.centrodeacogida.org/licencia.asp> (2010年1月閲覧)
 - 23) ただしギリシア州では2003年7月より。
 - 24) ただしアンダルシアでは1 m 以内。
 - 25) アリカンテ・カミーノ友の会 Los Amigos de Camino de Alicante では、各カミーノのルートのご案内に、ある巡礼グループが提供した4つの項目を掲載している——距離 km, 巡礼者数, 気温, そして犬の頭数である [Frey 1998:107]。
 - 26) Hape Kerkeling 著, *Ich Bin Dann Mal Wag Meine Reise auf dem Jakobsweg* (2006年刊行)。2007年までのドイツ国内総発行部数300万部を超えるカミーノ旅行記。2010年現在19言語以上に翻訳されている。彼は、6ヶ国語を話す語学力を活かして多様な巡礼者と交流した様子に脚色を加えて記した。本書を読んだ多くのドイツ人がサンティアゴ巡礼に出かけるようになり、2007年以降、ドイツ人の巡礼者数は著しく増加した。ちなみに、ここで登場するペルー人のシャーマン、ルコ・ウルコは、他の巡礼者の前ではエクアドル出身のホルヘとして現れる。この犬まね事件後にも彼は時々カーケリングの前に登場する。
 - 27) 推測に過ぎないが、おそらく、ペルーの伝統的呪術であるクランデリスモ (curanderismo) と

考えられる。

- 28) この日数の間隔は、一般的な行程 Saint Jean Pie de Port からサンティアゴ・デ・コンポステラまで平均約30日から40日かかることを基準に設定した。もちろん、全員が25日以上歩くわけではないので、その場合は5日目と、カミーノを去る日（途中帰宅ないしサンティアゴ到着）だけのものもある。
- 29) Saint Jean Pie de Port にあるいくつかのアルベルゲのうち、とりわけこのアルベルゲはサービスの良さなどで定評があり、予約せずに宿泊することは難しい。アルベルゲは原則予約を受け付けない、と多くのガイドブックに記載されており、このアルベルゲに宿泊する人は、インターネットなどで予め情報を得た人か、フランス国内を歩いているときに他の巡礼者から情報を得た人か、2度目以上の人が他の巡礼者との会話のなかで情報を得た人である。わたしは、出発前の4月にカミーノ沿いのアルベルゲでボランティアとして巡礼者と接していたときに、ある巡礼者にこの宿を薦められた。したがって、Saint Jean Pie de Port は、ある人にとっては出発点だが、ある人にとっては通過点であることの例として捉えていただきたい。
- 30) もちろん、この見方は個々の事物・生物が複合的にはたらきかけ、それに気づくことによって個々の生が持続するというアフォーダンスの考え方に関連づけられるだろう。しかし、生態心理学が強調する諸物との視覚的な関わり合いと気づきが「適切」な動きを誘導するという考え方や、人間のミクロな動作は物的な環境に左右されるという脈絡におけるアフォーダンスの概念に対しては、慎重でありたい。
- 31) その探索姿勢は冒頭で述べた、混沌とした事象のなかに何らかの因果や脈絡を見つけたいという傾向をもつフィールドワーカーの姿勢と重なる。とりわけ本稿で特徴づけた点において、足で調査するフィールドワーカーと、本稿で考察した徒歩巡礼者は、根本的なかたちで関わっている。徒歩実践と人類学的フィールドワークの関連性について、リーとインゴルドが民族誌的に論じている[Lee & Ingold 2006]。

参考文献

- 石井美保 2007 『精霊たちのフロンティア——ガーナ南部の開拓移民社会における“超常現象”の民族誌』世界思想社。
- 岡本亮輔 2012 『聖地と祈りの宗教社会学——巡礼ツーリズムが生み出す共同性』春風社。
- カーケリング, H. 2010 『巡礼コメディ旅日記：僕のサンティアゴ巡礼の道』（猪股和夫訳）みすず書房。
- 関根康正 2006 『宗教紛争と差別の人類学——現代インドで〈周辺〉を〈境界〉に読み替える』世界思想社。
- 田中雅一 2006 「序論 ミクロ人類学の課題」田中雅一・松田素二編『ミクロ人類学の実践——エイジェンシー／ネットワーク／身体』世界思想社, pp. 1-37。
- 常田夕美子 2011 『ポストコロニアルを生きる——現代インド女性の行為主体性』世界思想社。
- 土井清美 2009 「旅を栖とす——サンティアゴ徒歩巡礼における身体・場所・動き」『超域文化科学紀要』14:51-68。
- ド・セルトー, M. 1987 『日常実践のポイエティック』（山田登世子訳）国文社。
- 仲正昌樹 2011 『ヴァルター・ベンヤミン：「危機」の時代の思想家を読む』作品社。
- パフテン, M. 1982 『叙事詩と小説』（川畑香男里他訳）新時代社。
- ベルク, O. 1993 『都市のコスモロジー——日・米・欧都市比較』（篠田勝英訳）講談社現代新書。
- ベンヤミン, W. 1994 「歴史の概念について」野村修訳『ボードレール 他五篇 ベンヤミンの仕事2』岩波文庫。
- 2003 『バサージュ論 第三巻』（今村仁司他訳）岩波現代文庫。
- 箭内匡 2008 「イメージの人類学のための理論的素描——民族誌的映像を通じての「科学」と「芸術」」『文化人類学』73-2: 180-199。
- リンチ, K. 2007 『都市のイメージ 新装版』（丹下健三, 富田玲子訳）岩波書店。

- Bender, Barbara & Paul Aitken 1998 *Stonehenge : Making Space*. Oxford and New York: Berg Publishers.
- Berger, John & Jean Mohr 1995 *Another Way of Telling*. New York: Vintage Book.
- Bhardwaj, Surinder Mohan 1973 *Hindu Places of Pilgrimage in India : A Study in Cultural Geography*. California: University of California Press.
- Coleman, Simon 2004 From England's Nazareth to Sweden's Jerusalem. In Simon Coleman & John Eade eds. *Reframing Pilgrimage : Cultures in Motion*. London: Routledge, pp. 45-68.
- Coleman, Simon & John Eade 2004 *Reframing Pilgrimage : Cultures in Motion*. Routledge.
- Coleman, Simon & John Elsner 2003 *Pilgrim Voices : Narrative and Authorship in Christian Pilgrimage*. New York: Berghahn Books.
- Collier, John & Malcolm Collier 1986 *Visual Anthropology : Photography as a Research Method*. University of New Mexico Press.
- Eade, John & Michael J. Sallnow 1991 *Contesting the Sacred*. London: Routledge.
- Edensor, Tim 2008 Walking through Ruins. In Jo Lee Vergunst & Tim Ingold eds. *Ways of Walking : Ethnography and Practice on Foot*. Hampshire: Ashgate Publishing Limited, pp. 123-141.
- Egan, Keith 2010 Walking Back to Happiness? Modern Pilgrimage and the Expression of Suffering on Spain's Camino de Santiago. *Journeys* 11: 107-132.
- Frey, Nancy Louis 1998 *Pilgrim Stories : On and Off the Road to Santiago*. Berkeley: University of California Press.
- Gibson, James J. 1986 *The Ecological Approach to Visual Perception*. Psychology Press.
- Heelas, Paul 1996 *The New Age Movement : The Celebration of the Self and the Sacralization of Modernity*. Blackwell.
- Heidegger, Martin 1971 Building, Dwelling, Thinking. *Poetry, Language, Thought*, Pelennial Classics. New York: Harper Collins, pp. 141-160.
- Hirsch, Eric & Michael O'Hanlon 1995 *The Anthropology of Landscape Perspectives on Place and Space*. New York: Oxford University Press.
- Hoinacki, Lee 1996 *El Camino : Walking to Santiago de Compostela*. Pennsylvania State University Press.
- Hönemann, L. & W. Nentwig 2010 Does Feeding on Bt-maize Affect the Slug *Arion Vulgaris* (mollusca: Arionidae) ? *Biocontrol Science and Technology* 20: 13-18.
- Ingold, Tim 2009 Against Space: Place, Movement, Knowledge. In Peter W. Kirby ed. *Boundless Worlds : An Anthropological Approach to Movement*. New York: Berghahn, pp. 29-43.
- 1993 Globes and Spheres: The Topology of Environmentalism, In Kay Milton ed. *Environmentalism : The View from Anthropology*. London: Routledge, pp. 29-40.
- Ingold, Tim & Jo Lee Vergunst eds. 2008 *Ways of Walking : Ethnography and Practice on Foot*. Hampshire: Ashgate.
- Kahn, Miriam 1996 Your Place and Mine: Sharing Emotional Landscape in Wamira, Papua New Guinea. In Steven Feld & Keith H. Basso eds. *Senses of Place*. New Mexico: School of American Research Press, pp. 167-196.
- Laffi, Domenico 1997 *A Journey to the West : The Diary of a Seventeenth-Century Pilgrim from Bologna to Santiago de Compostela*. Leiden: Primavera Pers.
- Lee, Jo & Tim Ingold 2006 Fieldwork on Foot: Perceiving, Routing, Socializing. In Simon Coleman and Peter Collins eds. *Locating the Field : Space, Place and Context in Anthropology*. Oxford: Berg, pp. 67-86.
- Lund, Katrin 2008 Listen to the Sound of Time: Walking with Saints in an Andalusian Village. In Tim Ingold & Jo Lee Vergunst eds. *Ways of Walking : Ethnography and Practice on Foot*.

- Adlershot: Ashgate, pp. 93-104.
- Merleau-Ponty, M. 1964 *Sense and Non-Sense*. Northwestern University Press.
- Michalowski, Raymond & Jill Dubisch 2001 *Run for the Wall: Remembering Vietnam on a Motorcycle Pilgrimage*. New Brunswick: Rutgers University Press.
- Nadal, Paco 2008 *El camino de santiago a pie*. El pais aguilar.
- Olwig, Kenneth R. 2002 *Landscape, Nature, and the Body Politic: From Britain's Renaissance to American's New World*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Pratt, Mary L. 1992 *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London: Routledge.
- Quesada-Embid, M. C. 2008 *Dwelling, Walking, Serving: Organic Preservation along the Camino de Santiago Pilgrimage Landscape*. Ph. D. Dissertation submitted to the Antioch University.
- Rapport, Nigel 2007 Bob, Hospital, Bodybuilder: The Integrity of the Body, the Transitivity of Work and Leisure. In Simon Coleman & Tamara Kohn eds. *The Discipline of Leisure: Embodying Culture of 'Recreation'*. New York: Berghahn, pp. 23-38.
- 2008 Walking Auschwitz, Walking without Arriving. *Journeys* 9:32-54.
- Reed, Edward S. 1996 *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*. New York: Oxford University Press.
- Roseman, Sharon R. 2004 Santiago de Compostela in the Year 2000: From Religious Center to European City of Cultures. In Ellen Badone & Sharon R. Roseman eds. *Intersecting Journeys: The Anthropology of Pilgrimage and Tourism*. Urbana: University of Illinois Press, pp. 68-88.
- Sallnow, Michael J. 1987 *Pilgrims of the Andes: Regional Cults in Cusco*. Washington, D. C.: Smithsonian Institution Press.
- Timothy, Dallen J. & Daniel H. Olsen 2006 *Tourism, Religion and Spiritual Journeys*. London: Routledge.
- Turner, Victor 1974 *Drama, Field, and Metaphors: Symbolic Action in Human Society*. New York: Cornell University Press.
- Urry, John 1990 *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. California: Sage.
- Vázquez de Parga, Luis, José M. Lacarra & Juan Uría Riu 1949 *Las peregrinaciones a santiago de compostela*. Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas, Escuela de Estudios Medievales.
- Vergunst, Jo Lee 2008 Taking a Trip and Taking Care in Everyday Life. In Tim Ingold & Jo Lee Vergunst eds. *Ways of Walking: Ethnography and Practice on Foot*. Adlershot: Ashgate, pp. 105-122.

インターネット資料

- Weidema, Inger. 2006 NOBANIS - Invasive Alien Species Fact Sheet - *Arion lusitanicus*. From Online Database of the North European and Baltic Network on Invasive Alien Species.
<http://www.nobanis.org/> (2011年4月2日閲覧)
- CIAA *Centro Integral de Acogida de Animales*
<http://www.centrodeacogida.org/licencia.asp> (2010年1月閲覧)